

日本仏教の未来
ジョージ・タナベ
(翻訳:大來尚順)

序章:

1988年、私はリサーチを目的として高野山大学に数ヶ月滞在しましたが、毎晩大学から自分の部屋に戻ると時間をもて余していました。そこで、ハワイにおける日本仏教寺院の衰退について自分なりの考えを書き留めることにしました。原稿を書き終え、良き友人であり同僚であった星野英紀先生(大正大学 元学長)に見せてみました。すると、星野先生は原稿を読むなり、鳥井由紀子氏の力を借りて日本語に翻訳することを提案してくださり、佼成出版社まで紹介してくださいました。その結果、1990年に『日本仏教の再生』という題名で本として出版されました。これはすべて30年前に起こったことです。

2006年にハワイ大学の教授を退職後、私は仏教伝道協会ハワイで働いています。2年前より、日本の仏教伝道協会 理事長である桂紹隆先生と共に仕事をさせて頂いており、嬉しく思っております。あるとき、桂先生に著書『日本仏教の再生』を差し上げたところ、この本の内容について日本で講演し、佐々木閑先生と対談してみたら面白いのではないかという提案を頂きました。本の内容は30年以上も前のことであり、私の考えの多くも変わっているにも関わらず、本日のような機会を作って下さった桂先生には、心よりお礼申し上げます。また、仏教伝道協会の青木晴美常務理事にもお礼申し上げます。本日の講演は英語となってしまうことをお許し下さい。そのために翻訳して下さいた大來尚順氏に心より感謝致します。

私はハワイの日本仏教寺院が若い世代の門徒や檀家をひきつけることができず、深刻な衰退の危機に直面しているときにこの本を書きました。この本は、寺院仏教の衰退の原因を分析した私の試みであり、同時に現在と未来に適した仏教を想像することによって寺院を再興する手立ての提示でもありました。それは、新しい何かを生み出すことであり、どんなに尊敬の念を持つ過去であっても断ち切らなければならないことを意味していました。

後ほどお分かりになると思いますが、私の考えの中には過激なものもあります。ハワイでは、私は寺院に対する過激な批評家として知られていますが、開教使や門信徒・檀信徒の方々は皆、友だちのままですし、共に仕事をしています。彼らは私の批判が破壊を意味するのではなく、むしろその反対で存続と成長を手助けするものだと分か

っているのです。しかしながら、私は彼らと共に活動して30年以上になりますが、受け入れてもらえた提案は、ほんの微々たるものです。よって、私は自分の考えを繰り返し伝えていますが、寺院の衰退を目にし続けています。5年前、私はある寺院を訪問し、4人の老婦人にお会いしました。その中の一人が、誇らしげに自分が会合の中で最年少だと仰いました。そこで「おいくつですか？」と尋ねたところ、「84歳です」と回答がありました。これは5年前の話です。今日、他の多くの寺院と同じく、特にへき地においては、寺院は廃寺寸前です。

私の著書と本日の講演内容はハワイで起こっていることがベースとなっていますが、日本で起こっていることと類似するものがあると思います。ハワイの寺院衰退の原因は数多くあります。田舎から都会への人口移動、門信徒・檀信徒の若手不足、開教使不足、資金不足など、様々です。しかし、衰退の重大な原因は、寺院において仏教がどのように実践(プラクティス)されているのかということに関係しています。

一般の方々は、長年にわたって門信徒・檀信徒であっても、儀式や教えが何を意味するのか理解していません。また、葬儀や年忌法要は別として、開教使や在家門信徒・檀信徒のリーダーは、仏教が日常生活にどのように関係するのかという説明には明るくありません。私の日系1世の祖父と日系2世の両親は篤信な浄土真宗門徒でしたが、浄土真宗の理解としてではなく、日本文化の習わしとして仏教を実践(プラクティス)していました。私のような日系3世、私の息子や孫のような日系4世、日系5世にとっては、日本文化は外国文化です。ほとんどのアメリカの家庭のように、私の家庭は非常に多様性に富んでおり、日本人、中国人、ネイティブハワイアン、ポルトガル人、フィリピン人、コーカサス人(白人)の先祖を含んでいます。教育も受け、非常に現代的であるが故、仏教は必要であれば受容されるという感じですが。

この文化変容の問題は深刻なものです。インド仏教が中国仏教になり、中国仏教が日本仏教になったように、ハワイやアメリカ本土の日本仏教はアメリカ仏教になるべきなのです。今日、アメリカ仏教と呼ばれるようなものがあり、数百にもおよぶアメリカ仏教のグループが存在しますが、日本仏教寺院はこのアメリカ仏教には属していません。日本仏教寺院は、非常に民族中心主義で、日本の仏教宗派と組織的に関係を持ったままです。教団の90%もしくはそれ以上を年配の日系アメリカ人が占めます。つまり、非日系人すなわち若い世代の日系人を含む多くのアメリカ人は、古いしきたりの寺院に心地よさを見出せないのです。

日本仏教寺院はかなりアメリカナイズされつつありますが、特に儀式を中心にまだ取り組むべき課題は山積みです。しかし、日本文化とアメリカ文化のギャップの橋渡し以

上に深刻な問題があります。その大いなる挑戦とは、年配の世代と若い世代とのギャップの橋渡しです。これは、キリスト教会にとっても同じく深刻な問題です。全体として、アメリカの組織化された宗教は衰退しています。私のキリスト教徒の友人との会話は、著しく仏教徒との会話と類似しています。信徒は減少し、高齢化。若い世代は、教会に興味を示さない。牧師不足。財政困難。同じように聞こえませんか？伝統的なキリスト教の教会と仏教寺院は、両者共に将来を脅かす同じ問題に直面しているのです。つまり、十分な若い世代の人々をひきつけることができていないのです。おそらく、日本の仏教寺院も世代のギャップという同じ問題を抱えているのではないのでしょうか。もちろん、皆さんは私以上に日本の仏教寺院事情を理解されていると思いますが。

さて、ハワイの日本仏教寺院が抱える基本的な問題は2つあります。両方とも文化に関する問題です。一つは、日本とアメリカという二つの文化間の問題です。そして、もう一つは、一つの文化内における過去と現在の問題です。言い換えるならば、一つは異文化の問題であり、もう一方は現代化の問題と言えるでしょう。日本の仏教事情においては、日本とアメリカの文化のギャップはあまり大きな問題ではないと思うので、二つ目の問題である現代化、つまり現代や未来のために何か新しいものを創造するということに焦点を当てたいと思います。ここで私が明確にしておかなければならないのは、私の主な文化的関心は、日本でも、アメリカでも、ハワイでもなく、仏教文化とその伝統だということです。現代化への私の関心は、特に仏教であり、伝統仏教からどのようにして真の現代仏教を創造するかということにあるのです。これは、先ほども言及したように、過去を断絶する意志が必要になります。しかし、私は一種の保守的過激派であり、議論の中心は、仏教は長い歴史の中で常に新たに構築し再構築されながら存続してきたという事実をもとに、過去から学び、過去を断絶し、新たなもの創造できるということにあります。

序章の締め括りとして、一言お伝えしますが、本日私は研究者もしくは一仏教宗派の信仰者として話すのではありません。仏教には現代世界の幸福に多大な貢献ができると確信する外護者としてお話するつもりです。それでは、この仏教と呼ばれているものは一体何なのでしょう？この問いから始めたいと思います。

仏教:

実は仏教を意味する英単語「Buddhism」に単数形はありません。それは複数形として多くの仏教が集合しているからです。他の諸宗教と同様に、仏教は2500年以上もの歳月を経てかなり変容を遂げました。それ故、多くの分裂、ダルマの理解をめぐる数多

くの議論、多様な戒律とその解釈、多種多様な儀礼と行が存在しています。特に東南アジアの厳格な僧侶は、日本の僧侶を見ては、なぜ結婚、性行為、飲酒が可能で、その他にもある伝統的な戒律を破ることができるのか不思議に思っています。また、日本仏教の各宗派は、それぞれの宗派の本尊や菩薩に傾注し、教えの基盤は一つかひとまとまりの経典に置き、その他の経典を重要視しません。(世界中)どの仏教宗派も釈迦牟尼仏を崇拜しますが、日本では釈迦牟尼仏を本尊としている寺院はほとんどありません。これは、キリスト教の教会とは著しく異なります。日本仏教と同じく様々な宗派の教会が存在しますが、どの教会も同じ一冊の本を聖書として使用し、崇拜の対象も同じジーザス・クライストです。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教にも宗派の相違はありますが、仏教界はそれらとは対比的にさらに多様性に富んでいます。

この多様性は、長所と短所の両方を持ち合わせています。短所としては、あまりに多くの異なる仏教が存在し、それらが相互に矛盾しているため、仏教を定義することを困難にしていることです。通常、仏教の定義を尋ねると、大抵戻ってくる回答は四聖諦ですが、多くの方々が四つの教えを言うことができません。言えたとしても、第三の真実である滅諦についてどう思うかと尋ねると、ほぼすべての人が苦しみを滅することは不可能だと答えます。結局、仏教は四聖諦であるという定義は成立しなくなります。もしどこか特定の宗派に所属している場合、空海、日蓮、法然、親鸞、最澄、道元が説いたことの説明はさらに難さを増します。また、ダルマは説明できないものであり、言葉や思考を越える不可思議なものだと言う人もいます。朝鮮半島を渡り仏教が6世紀に日本に辿り着いたとき、韓国の王は手紙を添え、仏教はあまりに深遠ものであり、理解されなかったと綴っています。また、孔子のような中国の賢明な人でさえ、仏教の経典は理解できなかったと言っています。さらに、数百に及ぶ経典が存在しますが、これらすべてを読める人は極わずかです。仏教はその広大さと深遠さ故、定義が困難なのです。

仏教が正式に日本に紹介されるまでに、仏教という宗教は大乗仏教の誕生によって大きな発展を遂げていました。研究者は大乗仏教の起源について議論していますが、佐々木先生はこの議論について重要な論文を執筆されています。佐々木先生の視点は非常に興味深いもので、まさに本日私が言及すべきことと関係しています。佐々木先生は、大乗仏教が一つの分派グループから誕生したとも、諸僧院から離れた在家者たちの中から誕生したとも考えておられません。佐々木先生の考えでは、仏教を一つの教えで定義しなければならないという見解に歯止めをかけるような変化が世間一般的に起こり、多種多様なグループの教義を認める傾向が生じてきたということです。異なる教義を生み出した人々は、すべての仏教グループがいくつかの共通儀礼を共有できる限り、サンガ(僧伽)を分裂させる罪悪感に苛まれることはなかったという説です。佐々木先生の言葉を借りれば、これは「仏教と考えられるありとあらゆるタイ

ブを認めた僧院協定の新しい様式の結果として、様々な場所で同時に生じた網目のような宗教運動」だったのです。[Shizauk Sasaki, “A basic Approach for Research on the Origins of Mahayana Buddhism” in *Acta Asiatica*, vol. 96 (February 2009), P.38] 村上真完先生は、大乘仏教が誕生する以前でさえ、初期仏教は「新しい教義や表現を自由に考え、創造することを許す寛容性」を持ち合わせていたと言及されています。[Shinkan Murakami, “Early Buddhist Openness and Mahayana Buddhism” in *Sambhava: Nagoya Studies in Indian Culture and Mahayana Buddhism* (2008), p. 111].

諸宗教の歴史において、この種の寛容性は珍しく注目すべきものです。これは、仏教徒が正統派の信仰を創らず、異説を唱える人々を咎めなかったということを示唆しているわけではありません。他の宗教と同じく、異論に対して正論を強調し、仏教徒は何が正しくて、何が悪いのか議論をしています。しかし、これらの議論は、異なる教義に対して驚くべき寛大さを持ち合わせた広いコミュニティーの中で起こったのです。この「あらゆるタイプの考え」を迎え入れる寛容性が、多種多様な仏教の発展をもたらしたのです。そして、ここに多種多様性を認めるという仏教の長所があるのです。この自由主義が上座部仏教と並ぶ大乘仏教を生み、さらに大乘仏教の中で多種多様な教義や宗派が出現したのです。この過去に起こった仏教の変容の特質は、現代の信仰の自由思想と非常に互換性があります。それこそが、過去に大乘仏教が新たな仏教として発展したように、未来に向けた多様性に富んだ新しい仏教の創造を容認する寛容性なのです。

では、仏教とは何なのでしょう。ブッダは八万四千の教え説いたと言われています。もちろん、これは文字通りに理解するのではなく、仏教の伝統における膨大な教えの数の比喩です。そう言われるのは、ブッダや彼の後継者たちは説法をする相手やグループによって教えを変容したからと言われています。換言すれば、教えは人それぞれの特質的な環境に順応するように修正されてきたということです。これが仏教の中核思想である縁起の教えです。仏教自体を含め、すべての物事は、時間と場所によって変化する因と果によって生じています。すべてに対して言えるように、仏教も常に変化する状態にあるのです。これがもう一つの仏教の根本思想です。仏教は変化の環境の中で生じては消滅し、また生じては消滅することを繰り返します。輪廻の世界にある限り、仏教は生まれては死に、そしてまた生まれ、これを繰り返す中で、無数の方法で輪廻の輪から離れ、涅槃に入る道を提示するのです。ダルマ自体が変わることはないかもしれませんが、その表現や解釈は変化しており、様々な環境に順じて変容すべきなのです。

では、仏教とは何なのでしょう。それは、仏教徒コミュニティーが変化する環境によ

って創出するものです。仏教の歴史は、常に苦を滅する最善の手段を模索する上で、仏教は変幻自在、寛容、且つダイナミックであり続ける必要性を示唆しています。それは、全部で八万四千もある古代のメロディを新たな旋律に改良することに長けた方々によって奏でられた音楽に振り付けられた素晴らしいダンスなのです。

釈尊:

私たちは実在の釈尊を知りません。知っているのは、釈尊の死後から数世紀後に書かれた内容です。釈尊の伝記は、超人的肖像を創出しています。釈尊は、普通の人間のように生まれず、兜率天から降りてきて、六牙の白像として母親の胎内に入り、奇跡のような方法でこの世に誕生しました。母親から生まれるや否や、釈尊は普通の幼児のように産声を上げるのではなく、代わりに「天上天下 唯我独尊 三界皆苦 吾当安此」という賢人の宣告をします。そして、地は揺れ動き、曇りのない空から蓮華と睡蓮が雨のように降り、太陽は赤々と輝きます。さらに、木々は突如として花を咲かせ、ダンシングブレスレットを着飾った女性たちの歌声に調和する香りを漂わせたそうです。

私はこの物語を学生に話す度に、実際の人間について話していると思うか尋ねます。もちろん、学生は単なる伝説であり、空想の物語だと答えます。これは実際の人間の話ではありません。すると、私は別の話を持ち出し、その話の中で男性を介さずして妊娠した女性の話をします。聖母マリアは、後に物議を醸し出す宗教指導者として成長し、殺害され、埋葬された三日後に墓から蘇ることになった男児を出産しました。そして、この物語についても実際の人間について話していると思うか尋ねます。すると、ほとんどがキリスト教徒である私の生徒たちは沈黙します。続けて、私はジーザスや釈尊がいかにか特別な存在であるかを提示するために寓話や伝記がどのように作用しているのか語ります。このようなファンタジーのような物語は、そのまま鵜呑みにするのではなく、事実というよりはイマジネーションを基盤とする美しい宗教の物語として理解すべきです。なぜならば、完璧な平和、無条件の愛、絶対の美を持つ世界を創造できるのは、私たちのイマジネーションでしかないからです。

ファンタジーは、私たちの生活に極めて必要不可欠です。私たちは、苦しみに終止符を打ち、世界平和を実現し、憎しみを断つという夢を諦めてはなりません。現実として、これらが不可能なことは誰でも分かっています。だからこそ、理想の夢として持ち続ける必要があるのです。元来、理想は実現できないものです。よって、理想は実現できると思い込みに、自分自身を欺すべきではありませんが、決して理想を捨てるべきではありません。なぜならば、理想は私たちの人生に指針を与え、未開の人生に正しい道

を示し、結果的には理想に近づけてくれるからです。私たちが世界平和を実現することは決してないでしょうが、その実現にむけて努力を止めるべきではありません。私たちの夢とファンタジーは、私たちが進むべき方向を示してくれる理想なのです。物語のなかで語られる釈尊の人生は、苦しみに終止符を打つという理想に私たちを導く道を提示しているのです。

私たちは釈尊がどの時代のどこで生きた実在する人間であったかを知る証拠を十分持っています。諸伝説に埋もれた実在の人物を見ることはできませんが、それらの伝説は釈尊の何が重要なのか伝えてくれます。つまり、ここでフィクションと寓話が作用するのです。これらは事実を伝えてくれはしませんが、代わりに真実を伝えてくれるのです。

釈尊の人生は寓話の中に含まれていますが、彼の初期の教えは現実的且つ実践的なものです。後に世界の本質や心の機能に関して哲学的且つ比喩的な論理を伴うようになった仏教は非常に複雑で、結果的に仏教は難解であるというイメージを生み出しました。しかし、釈尊の初期の教えは非常に簡潔です。法句経を例にとってみましょう。この中には、「怒りは怒りによって鎮まらない。忘れてこそ、怨みは鎮まる」という一文があります。これは、法句経で語られた古の真実ですが、私たちの時代でも未だに真実です。この真実は如何なる場所の誰にでも簡単に理解できますが、実行するのは難しい教えです。実際、私たちはどのようにして自分を憎む人を愛すればよいのでしょうか。この教えを完全に行として実践するのは不可能ですが、何度も言うように、理想は決して捨てるべきではありません。理想としては「善いことを行じ、悪いことはするな」というシンプルな言葉ではありますが、それは魅力的且つ時として複雑な業の教義の中に編み込まれています。

大乘仏教は釈尊入滅から数世紀後に生起し、大革命をもたらしました。佐々木先生の方がより詳しいと思いますが、大乘仏教の起源に関しては多くの理論が存在し、私が大乗仏教の生起の問題を解明することは無論不適格です。しかし、もし視点を大乘仏教の起源を、多くの新たな経典を伴った後の仏教の開花として移し変えるならば、大乘仏教が諸仏、諸菩薩、神々、明王、神格化した祖師たちなど、驚くべく数の神聖なる存在を生み出したということは容易に理解できます。人間である釈尊自身は、法華経の中で久遠仏として変容を遂げました。これは、私たちの行為を完全に熟達させる努力を通してブッダ(覚者)に成る道を説いた初期仏教の教えとは真っ向から矛盾するものです。神格的な存在とは微塵たりとも言われていないのです。初期仏教は、すべて人間の自力を説いていたのです。

しかし、今言及したように、自己を完全させることは不可能に近いことです。だからこそ、人が自身の行為という業を完全に熟達させることでブッダ(覚者)に成るには数劫にも及ぶ長い時間と多くの輪廻が必要になると言われたのです。理解するのは容易ですが、行じることはほぼ不可能なのです。『仏教聖典』には、「人びとの生活は、山のような罪業を担って、迷いに迷いを重ねてきている。だからこそ仏や菩薩の手助けが必要なのだ」(『和英対照 仏教聖典』p.203)と、明確に記載されています。有神論とは、「他力」によって人々を救済できる神聖な存在に対する信仰のことです。大乘仏教が仏教にもたらしているのは、まさにこの有神論です。人間は不完全な存在であり、自力ではブッダ(覚者)にもなることはできず、浄土に生まれることもできません。もし日本仏教寺院の中に入ったら、目に映るのは阿弥陀如来像一体だけの本尊か、諸仏・諸菩薩・神・明王のグループが安置されており、その存在性には非常に感銘を受けます。人間は弱く、神聖なる存在の助けが必要なのです。

もちろん、有神論は多くの宗教の中核を担いますが、死と弱さという人間の普遍的経験の証とでもいうべきものなのです。人々は、神聖なる存在の力を自身の不完全さや恐怖を乗り越える手助けへと変容させます。この神聖なる存在の力は、自身の弱さ故に救済に値しない人々であっても与えられる力として恵み(グレイス)と呼ばれます。有名な賛美歌にもこう書かれています。

Amazing grace how sweet the sound
That saved a wretch like me.
I once was lost but now am found,
Was blind but now I see.

アメージング・グレイス
何と美しい響きであろうか
私のような者までも救ってくださる
道を踏み外しさまよっていた私を
神は救い上げてくださり
今まで見えなかった神の恵みを
今は見出すことができる

キリスト教徒にとって、神の恵み(グレイス)は罪の問題を解決してくれるものです。そして、仏教徒にとって、仏の恵み(グレイス)は悪業の問題を解決してくれるものです。西洋の有神論的宗教においては、神は全人類の理解を超越しているため、その存在を説明することはできません。また、大乘仏教の有神論においては、仏やダルマは同じく

不可思議なものです。法身は説明できません。西洋宗教と大乘仏教の双方における恵み(グレイス)は、ミステリーとしての役割を担い、そして誰もが授かることができる恵み(グレイス)という名の贈り物に対する唯一無二の返答は、感謝なのです。

初期仏教の教えは理解しやすく行じ難いということに反して、大乘仏教の教えは難解ですが行じ易いものとなっています。寺院の檀信徒や僧侶はずっと仏教の理解が難しいと言っていますが、その通りだと思います。しかし、行じるのは簡単なことです。もしあなたの宗旨が浄土宗もしくは浄土真宗であれば、南無阿弥陀仏ととなえるだけです。もしあなたの宗旨が真言宗であれば、南無大師遍照金剛ととなえるだけです。もしあなたの宗旨が日蓮宗であれば、南無妙法蓮華経ととなえるだけです。いかなる場合においても、あなたは阿弥陀仏、弘法大師、法華経など、何かしらの偉大な力を認識しているのです。また、あなたは儀礼に参加することで自分の仏教を実践することにもなります。その場合は、焼香以外は何もする必要はありません。あとは、ただ座って僧侶の読経を聞き、僧侶が儀礼を厳修するのを眺め、意味も分からないまま参拝者全員と般若心経、正信偈、法華経、もしくはその他のテキストを唱和するだけです。これが行じ易く、解し難いということです。

現代においては、理解に関してもう一つの問題があります。私たちの生活において科学とテクノロジーが担う重要度は益々高まっているため、人々は神聖なる存在に対する信仰を拒否し始めています。若い世代の人々は、宗教は科学的ではないため、宗教儀礼や信仰には魅力を感じません。仏教哲学が現代科学と一致するような分野は多く存在します。これも佐々木先生が言及されていることです。しかし、神の存在という話になれば、現代人、特に若者は、神聖なる存在に信仰を持つことに大きな抵抗感を持ってしまうのです。西洋哲学者と神学者は、数世紀にわたり神の存在の証明を試みてきましたが、科学的証明は未だなされたことはありません。神の存在を主張しない無神論が流行しており、その風潮は仏教界にも広がりを見せています。私は阿弥陀如来の存在を疑う浄土真宗の僧侶や在家信者を数人知っています。彼らは、阿弥陀如来はくせ毛と長い耳たぶを持った神聖なる存在ではなく、何か漠然とした靈性的現実だと言います。彼らにとっては、阿弥陀如来の仏像より、名号を本尊として安置した方が心地よいのです。これらの議論は、1960年代に流行した「神の死の神学」を思い出させてくれます。おそらく、浄土真宗で考えれば、「阿弥陀如来の死」ということになるでしょう。神聖なる存在は現代科学とは矛盾するため、現代人はこのような仏教的無神論を心地良く思うのです。

現代人の多くは伝統的な有神論には抵抗感を持っています。それ故、釈尊や神聖なる存在を説かない初期仏教を好むのです。アメリカの有名な仏教学者であるドナル

ド・ロペス先生(ミシガン大学)は、『現代仏教バイブル』という本を出版しました。通常、仏教興隆の歴史的背景は上座部仏教から大乘仏教を経て現代仏教と連なっていると予測しますが、ロペス先生はそうは主張しません。現代仏教は、19世紀後半に発展し、大乘仏教を遠回りして、釈尊の仏教に直接戻ったと言及しています。換言すれば、現代仏教は初期仏教の無神論主義と一致し、大乘仏教の有神論とは矛盾するのです。これは仏教の歴史上、興味深い視点です。初期仏教は、無神論的且つ現代科学と一致し、後に生じた大乘仏教は有神論であるため現代科学と矛盾するのです。この視点は、なぜ寺院が衰退しているのかということも説明しています。現代人の多くは、特に若い世代の人々ですが、神聖なる存在を信仰しません。従って、彼らは有神論的仏教寺院には行かないのです。しばしば、神聖なる存在を信仰していないからという理由ではなく、単に何も気にしていないということもありますが。

アメリカにおいて、仏教は上下という二方向へ動いています。寺院仏教は、衰退していますが、釈尊の現代仏教への関心は高まっています。瞑想やマインドフルネスの実践は学校、企業、軍隊でも開花しています。業、縁起、慈悲、諸法無我などの仏教思想は、アメリカの流行文化の一部となっています。誰もが「仏教に寺院は必要なく、仏教はただ慈悲の実践である」と説くダライ・ラマを知っています。寺院の本堂に安置してある神聖なる存在には全く興味が持たれていません。現代社会は益々世俗化しているのです。

音楽、ファッション、映画、思想、その他諸文化がそうであるように、宗教的流行も新たな因果によって変容します。現代社会において世俗化は重要な発展です。これまで保守的宗教指導者たちは世俗化に対して批判的姿勢を示してきましたが、昨今の先進的思想家も現代の世俗化に対して疑念を抱くようになりました。保守主義者も進歩主義者も、世俗化社会の問題の一つは、すべての問題は科学とテクノロジーで解決できるという信仰と個人主義を過度に強調し過ぎるという点で同意しています。これらの自己に関する現代批判を読む度に、仏教の歴史において、いかにこのような批判が古くさいものなのか気が付かされます。結論として、は永遠の自己を所有しているという思想を否定しました。過度の自己の強調は、自己中心性をもたらし、私たちはそのような人生へのアプローチは上手くいかないことは知っています。正直に言えば、私たちは自分の力ですべての問題を解決することはできないことを知っているのです。ここで疑問が生まれます。もし私たちが自分で自分を救うことができないならば、誰が救ってくれるのでしょうか。私たちは、すでに仏教的回答を理解しています。それは、私たちは自分で自分を救うことができないから、諸仏や諸菩薩に頼らざるを得ないということです。

これは、(現代化・モダン仏教とは反対の)現代仏教は上座部仏教の業の教えと大乘仏教の神聖なる存在の恵み(グレイス)の信仰を混合させることができるということの意味しています。自力の業と他力の恵み(グレイス)は、相互的に排他的ではなく、お互いに作用し合います。私たちには、釈尊の業の教えと大乘仏教の神聖なる存在の恵み(グレイス)の信仰の双方が必要なのです。そして、法句経のモラルの教えと大乘經典に登場する衆生を慈悲で包み、私たちの罪の自覚を通して恵み(グレイス)を授けてくれる諸仏、諸菩薩も必要なのです。上座部の釈尊と大乘の神々は、一羽の鳥の双翼のように一緒に作用できるのです。業の熟達の完成という理想に向かって取り組む必要はありますが、私たちは必ず失敗するでしょう。だからこそ恵み(グレイス)に対して寛容である必要もあるのです。ロペス先生が定義したように、現代仏教は、初期仏教に戻ることができますが、未来の仏教には大乘仏教の誓約である恵み(グレイス)も含まれていなければならないのです。

教義

仏教徒は教義に対して非常に曖昧です。仏教徒の中には教義を絶対的な本質として理解し、その教えを一边倒に支持する人もいます。仏教諸宗派は、それぞれの宗学によって宗派を定義し、それぞれの宗門大学や寺院にて教育します。もし、宗学から逸れるようなことがあれば、問題視され「異安人」(異端者)と呼ばれます。初期大乘仏教運動のリベラルで寛容な精神とは反対に、宗派の宗学は同じ志を持つ仲間を一つのグループに閉じ込め、異なる思想を持つ人を排除するという閉鎖的なシステムを持ちます。教義は簡単に狭いイデオロギーと化し、宗教的対立や暴力の原因にも成りうるのです。実際、キリスト教徒 vs ユダヤ教徒、仏教徒 vs イスラム教徒のように、カトリックやプロテスタントはお互いに争っています。今後も信仰者は争い、教義を守るために人を殺めることもあるでしょう。

しかし、教義をそこまで重要視しない仏教徒もいます。例えば、私の祖父のように、教義の重要性を感じていないため、教えを学ぶことに何も抵抗を感じない人もいます。私の祖父は、念仏をととなえ、焼香し、儀礼に参加するだけで満足でした。彼は、習慣としての仏教徒だったのです。また、なかには意図的に教義を拒否し、仏教は知的理解の問題ではなく、直感的洞察だと言う人もいます。ダルマは言葉を越え、思想を通して説明し理解できるものではないと主張します。また、彼らは言葉ではなく、沈黙の中で一輪の花を摘むというような、ブッダの説法や、仏教がどのように以心伝心されていくのかというような話を好みます。

教室や寺院で数百の講義や講演をしてきた教授として、私は知的過ぎる、エリート過ぎると、よく批判を受けます。しかし、大抵の人々は、無学の人も含め、説明と言葉を通して物事を学びます。もし私が一言も口にする事なく、一輪の花をもって教壇に立っていたならば、私は大学をクビになっていたでしょう。普通の人々は話をし、考えますが、それらは言葉があつて可能となります。偉大な精神指導者であれば、沈黙でも真理を掴むことが可能かもしれませんが、普通の人には不可能です。沈黙こそがエリートの道です。つまり、言語を通した知的理解の方法が大衆向きということなのです。

私たちは、世界をありのまま描写し、より良いものとするために言語の力を通して世界を支配しています。病気を解析しそれを治療するため、橋や建物を建立するため、鳥よりも早く空を飛行可能な航空機など驚くべく機械を製造するために科学用語を使います。言語の発見によって、人類は物事に名付けることが可能となり、世界を理解し支配することができるようになったのです。これは、木、石、女性、子ども、友だち、敵といった感じです。また、私たちは様々な価値や感情も理解できるようになりました。これは良い、悪い。嬉しい、悲しい。言語は、私たちに世界が存在するまま支配することを可能にしてくれましたが、それ以上の驚くべきことも可能にしてくれました。それは、世界には存在しない現実を創造する力を与えてくれたことです。

例えば、私の住んでいる村に見知らぬ人が来て、私に「湧き水はどこですか？」と尋ねたとします。私は、湧き水が村にあることを知っていますが、彼に「あの丘を越えたところですよ」と答えます。見知らぬ人は、私に感謝し、丘へ向かって行きます。私は自分が発見したことに驚きを隠せません。私は言葉を使っただけで、実際には丘の上に湧き水はないと知っているのですが、人に丘の上に湧き水があると信じさせることができたのです。私の発見したことは何かと言うと、言葉を使用した嘘の付き方、存在しないものを創造する仕方です。

言語を使って現実の世界に存在しないものを創造することこそ、宗教の本質です。宗教とは、私たちが住む世界よりもはるかに完全な世界を創造する言語システムです。これは驚くべき発見であり、私たちは素晴らしい平和の現実、幸福、永遠の命、善良なる天国、邪悪な地獄、最上の喜び、苦なき人生を描写する数百にも及ぶ本を書いています。現実世界においては、苦なき人生は不可能のように見えますが、この素晴らしい理想に興味があるならば、四聖諦の言葉をじっくり読むか、涅槃の描写を読んでみてください。涅槃は、輪廻という名の別の重要な世界よりもずっと良いものです。言語無しには教義は無く、教義無くして宗教はありません。だからこそ宗教は神聖な本を作り、その経典の言葉を神聖なる存在の言葉として崇拝するのです。

宗教言語は、現実世界では立証できない現実を創造するので、科学的に立証できる教義とできないものを識別することが重要になります。立証不可能な教義の言語は、文字通りに真実として理解すべきではありません。立証不可能な大乘有神論の教義は、寓話、夢、ファンタジー、フィクションとして作用します。例えば、阿弥陀如来の存在は、科学的には証明できませんが、それは阿弥陀如来を否定し仏像を他のものと置き換えるべきだということではありません。阿弥陀如来の価値と力は、阿弥陀如来がファンタジーだという科学的事実の中にこそ存在するのです。もし阿弥陀如来を文字通り真実であると主張するならば、科学的な人々を疎外することになります。

釈尊に関する議論の中で、私はすでにフィクションとファンタジーは事実を告げないが、真実を告げることを言及しました。11世紀にまで遡りますが、『源氏物語』の著者である紫式部は、このことを明確に理解していました。蛍の巻では、源氏は誰かのイメージネーションに由来し、嘘と変わらないフィクションを読んで玉鬘を批判しています。玉鬘は、物語はすべて信憑性のあるものだとして反論します。源氏は自分の過剰なフィクション好きを認めた上で、物語を嘘として片づけることは真実から逸脱することだと知っていたのです。源氏は、ブッダは譬えや方便によって彼と同じことをしたと言います。仏教は、真実を告げるフィクションでいっぱいなのです。[Murasaki Shikibu, *The tale of Genji*, trans. Edward G. Seidensticker (New York: Alfred A. Knopf, 1978), pp. 437-438]

ニュースなどのメディア界は、宗教的暴力の話でいっぱいです。宗教紛争には複雑な政治、経済、倫理的な理由が混在していますが、その中でも大きな理由となるのは教義です。自分の教義が絶対の真実を定義すると固執する信仰者は、異なる別の絶対の真実の教義を持つ人々とは和解できないでしょう。なぜ人が自分の考えが絶対に真実であるということを養護するために暴力を行使するのかは簡単に理解できます。しかし、もし彼らの教義上の信仰はファンタジーだったと理解したらどうでしょうか。彼らは自分たちの真実のために闘うことは厭わないでしょうが、果たしてフィクションのために闘うでしょうか。

教義は、信仰の定義に必要であり有効なものです。しかし、それを文字通りに真実だと信じるべきではありません。知識と信仰には違いがあります。ある時、お酒を飲みながら仏教学者が私にこう言いました。「私は浄土を信じているが、それが存在しないことを知っている」と。

経典

経典とは、ブッダの説法を記録したとされる聖なる書物です。どの宗教も、様々な聖なる書物が一つに集約され、一宗教の公式となる聖典を所持しています。主な西洋宗教は、閉鎖的な聖典を所持しています。キリスト教徒にとって、聖典はジーザスの物語を語る四つのゴスペル(福音書)から成る『新約聖書』です。閉鎖的聖典が故、たとえ他のゴスペル(福音書)が存在したとしても、これ以上ゴスペル(福音書)が追加されることはありません。ユダヤ教徒のヘブライ語の『聖書』やイスラム教徒の『コーラン』も同じく閉鎖的です。これがこれらすべての聖典がそれぞれ1冊の本から形成される理由なのです。

仏教は主要な宗教の中でも唯一、複数の言語で書かれ集約された寛容な聖典を持ちます。仏教には、サンスクリット語、パーリ語、チベット語、中国語、その他の言語による多様な仏教経典が存在し、数百巻によって構成されています。ご存知の通り、仏教伝道協会は中国語の大蔵経の翻訳事業に従事し、英訳大蔵経を制作しています。大蔵経の数は膨大ですので、この事業は壮大なものです。大蔵経は、お経(経)、哲学的註釈(蔵)、戒律(律)を含んでいます。大蔵経には85巻に約3000の経典が編纂されていますが、仏教伝道協会は、翻訳事業着手から34年が経過し、現在までに88典籍を出版しています。このままであれば、すべてを翻訳するのに1100年以上はかかるでしょう。

仏教経典の数は膨大であり、教えも多様性に富んでおり、たった一人に由来するとは考えにくいものです。経典は、通常「如是我聞」という経典の執筆者が釈尊から教えを聞いたことを意図する有名な句から始まります。もちろん、それは釈尊が入滅して数世紀経過して書かれたフィクションであることは明白なことです。大乘経典であればなおさらです。日本では、釈尊は大乘仏教を説いたのかどうかを巡る長い議論(大乘非仏説論)の歴史があります。残された教えの形跡を釈尊に尋ねることの面白みは理解できますが、結果として私はどっちつかずになるだろうと思います。なぜならば、経典の中のメッセージも釈尊がそれを本当に説いたのかという同じ問題を残すからです。経典は内容で判断されるべきであり、誰が書いたかは問題ではないのです。大乘経典は非常に多様性に富み、それらを釈尊と照らし合わせれば矛盾してしまいます。そうとなれば、私たちは釈尊を非常に混乱した人だったということに結論付けなければならぬでしょう。

佐々木先生や村上先生の意見に習い、大乘仏教の生起は様々な出所から派生した教えを容認したリベラルな土壌の上に繁栄したと理解するほうがより賢明です。仏教徒コミュニティがどんな教えにも寛容だったため、大蔵経も寛容且つ信じられないほど

多様性に富んでいます。人が何を信仰し、信仰しないかを指示するような支柱的仏教権力は存在しません。もし現代の各宗派寺院が衰退に直面しているのであれば、その原因は新しい考えに閉鎖的だからということになります。私たちは急速に変化する世界で生活しており、現代ビジネスでさえも変容しなければ取り残されてしまうことを知っています。IBM のモットーは、「Think」(発想する)でしたが、Apple のモットーは、「Think different」(発想を変える)です。以前、ワング・ラボラトリーズという会社のコンピューターこそが標準とされていましたが、変化し続けることに失敗し、現在ではコンピューターは作っていません。仏教は、新たに生まれてくる因果や新しい文化や時代に適した新たな教えと実践を発展させる、いわゆる変化する意志を持つが故、多国籍の宗教となりました。変化しない伝統は絶えます。変化し生き残るものは、伝統を断ち切ることこそが、すべての伝統の中でも最古の実践であることを理解しているのです。

大乘経典の作者たちは「Think different」(発想を変える)を信奉していました。彼らは、釈尊自身は説かなかつた有神論を説きました。鎌倉時代初期、法然、親鸞、日蓮、道元のような指導者たちは、今日では(鎌倉)新仏教と呼ばれているものを発展させました。「新しい」とは、古いものとは異なることを言います。明治時代の仏教指導者たちも新しい仏教を発展させました。この発想と革新の精神は、現代生活のあらゆる分野で歓迎されますが、その長い歴史は仏教の歴史の中に見られます。仏教を活発且つ輝かせ続ける最良の方法は、これまでに常に成されてきたことを実行することです。つまり、たとえ伝統からかけ離れたものであっても、新しい考えを容認することです。反対に、仏教を潰す最良の方法は、古い考えをしっかりと握りしめ、試行や新たな発想に水を差すことです。

私は、本講演の冒頭で、(アメリカにおける)日本仏教寺院はアメリカ仏教寺院へと変容を遂げることに失敗し、古風な考えと実践(プラクティス)を現代的に変容することにも失敗したため、死にかけているという事実を明確に指摘しました。保守的立場を保持し過去にしがみつくと、寺院は若い世代の方々にとっては役に立たず、結果的には仏教を潰してしまうでしょう。これはかなり過激な発言ですが、仏教の衰退は、寺院の外で起こっている社会変化に要因があるのと同時に、仏教自体の中にもその要因があるのです。伝統的な実践や思想に固執し、変化を拒むことで、開教使や在家者たちは、仏教には明るい未来がないことを自ら保証しているのです。私の観点から言えば、悲しく思うことは、新たな発想に閉鎖的であることは、未来に打撃を与えるだけではなく、新たな思想に寛容であり続けてきた過去より続くサンガの伝統への裏切りでもあるということです。今日においても意味を持つことであるならば、伝統を守っていることは決して悪いことではありませんが、それが意味のないものとなっているのであれば、新しいものと置き換える時期に来ているということなのです。

佐々木先生の提唱する大乘仏教の新しい思想への寛容性に関する理論の最大の証明は、大蔵経そのものの存在です。大蔵経は、言ってみれば、名も知られていない数多くの先人たちが記した数千の経典で紹介した新旧の思想のスーパーマーケットのようなものです。彼らは菩薩だったのでしょうか？悟っていたのでしょうか？おそらく違うでしょう。大乘仏教は釈尊に起因するかどうかの問題と同じく、そんなことはどうでも良いことです。重要なのは、書かれている内容です。本当の問題は、誰がその経典を書いたかではなく、その経典が何を意図しているかなのです。今日の私たちにとって、経典は有益且つ役立つものなのでしょうか。私たちは経典を読み、その判断ができる唯一の存在です。誰が書いたかなどの特に知る余地もないことを知る必要はないのです。経典を書いた人が誰であろうと、私たちは驚くべき思想の多様性に富んだスーパーマーケットを授けてくれた方々の意欲に感謝すべきなのです。たとえ経典の作者が祖師たちの忠実な弟子であろうと、結局は個人として書いたものであり、私たちが受け取るのは作者個人の解釈と自由裁量なのです。同様に、私たちはどの経典が有益で役立つものなのか選択する素晴らしい特権を持っており、その中で知識と自由裁量を行使するのです。私たちは経典を取捨選択できるのです。『選択本願念仏集』の中で法然が言うように、(元来)聖道門が説かれていましたが、それは捨てられ、易行道が採択されました。社会学者・神学者であるピーター・バーガーが記しているように、真実とは人それぞれの選択の問題なのです。

大蔵経は、経典の執筆者と読み手の創造的個性の顕彰なのです。それは、寛容な宗教による寛容な経典なのです。この注目すべき仏教の特徴は、古く伝統的というだけでなく、同時に完全に現代的でもあります。過去の仏教徒たちがサンガ(コミュニティ)に新しい思想や経典を加え貢献してきたように、私たちもそれぞれ自分の方法でサンガに革新的な思想や経典を加える貢献ができるのです。

仏教の未来は、大蔵経を開放的にし続けることにかかっています。その方法は、新しい経典を書き続けることです。もし新しい経典が書かれなければ、大蔵経は閉鎖されてしまいます。大蔵経を開放的にし続ける試みとして、私はハワイを舞台とした『ダイヤモンドヘッド経』というお経を書いてみました。これは、『日本仏教の未来』に収録されています。大昔に書いたので、何を書いたのか忘れていましたが、この講演の準備に際し、再度読み直してみました。正直言いますと、恥ずかしさでいっぱいです。しかし、書いたことに後悔はしていません。大蔵経を開放的にし続けようとしたと自負しています。もちろん、経典を書くというのは大事なことです。社会にそれを大蔵経に加えることを認めてもらうというのはまた別のことです。私のお経は、採用されておらず、未だ認めてもらえていません。しかし、過去に多くの方々が経典を書いたように、私たちも

多くのお経を書くべきです。そうすることで、社会はどれを大蔵經に加えるか判断することができます。もし私たちのような凡人にはお経を書く資格はないという方がおられれば、その方に人は皆、仏性を持っているという伝統的な大乘仏教の信念を思い出させてあげましょう。

要約

お分かりのように、私の仏教の未来への考えは、過去に仏教がどのように発展したかという理解を基盤としています。私の考えは一見過激に思われるかもしれませんが、それでも保守的にも感じるができると思います。なぜならば、過去の実践に基づいた考えだからです。最後に、私の主張をまとめさせて下さい。

仏教

仏教は、新しい思想を歓迎する寛容な宗教です。すべては移り変わるという教えに従い、仏教は置かれた新しい環境に従って吸収し変容するという特性を発揮し、過去に様々な文化や時代の中で繁栄してきました。もし未来での存続を希望するのであれば、仏教は変化に寛容であり続ける必要があります。

釈尊

釈尊の初期仏教の教えは、業の思想と善行の重要性を基盤としています。神聖なる存在が私たちを救済するというような教えはありませんでした。大乘仏教の生起と共に、神聖なる存在によって救済されるという思想が生まれたのです。私たちは、上座部仏教の業や大乘仏教の恵み(グレイス)のどちらかを選択する必要はありません。両方も受け取ることができます。現在は、迷信的且つ非科学的に捉えられている大乘仏教の有神論を迂回する傾向がありますが、私たちは上座部仏教の業と大乘仏教の恵み(グレイス)の両方を取り入れることができます。しかし、挑戦すべきことは、文字通りの事実としてではなく、有益なフィクションとしての神聖なる存在の理解を創造することです。もし神聖な恵み(グレイス)の理解とその役立て方を創造することができれば、未来の仏教を創造するために大乘仏教の信仰を生き返らせ、上座部仏教のモラルの教えと結合させることができます。ロペス先生が説明されているように、現代仏教は大乘仏教の有神論を無視しましたが未来の仏教は包含すべきなのです。

教義

大乘仏教を復活させるためには、科学的思考法と一致する方法で教義を解釈する必要があります。科学や理屈と矛盾する教義が多すぎます。しかし、それらを投げ捨てるのではなく、文字通りの真実としてではなく有益なファンタジーとして容認することで、まだ有効利用が可能です。ここでも、旧来の教えを使い、教義は文字通りの真実ではなく、方便であると言及できます。光源氏を例に挙げたように、私たちは数々の仏教教義はフィクションではありますが、それらを嘘として切り捨てることは真実から逸脱することになるのです。これは、未来の仏教に応用可能な昔ながらの教訓なのです。

お経

大蔵経の寛容性は、他の宗教の聖典の中でもユニークなものです。その膨大さにはよろめき、その多様性に圧倒されます。聖典に制限を設けるグループもあります。例えば、パーリ語の大蔵経は厳密に言えば閉ざされています。しかし、大蔵経全体としては、特に大乘仏教の大蔵経ですが、寛容且つ、ポール・ハリソン先生の言葉を借りれば、機能的です。ハリソン先生は、もし教えに意味があり、真理と矛盾せず、それが救いへと導いてくれるものであれば、それはイマジネーションの如何なる産物であろうともブッダの言葉として容認されるだろうと言及しています。[Paul Harrison, “Canon” in Encyclopedia of Buddhism, ed. Robert Buswell, et. Al (New York: Macmillan, 2004), p. 112]

「聖書」という言葉は、霊的な聖典を意味し、ドナルド・ロペス先生は著書『現代仏教聖書』において、現代の著者の書物も編纂し、大蔵経を開放しました。ロペス先生は、現代仏教は初期仏教に遡ると言いますが、著書で使用する經典の選択は初期仏教の教えに由来していません。ヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー、ダルマパーラ、鈴木大拙、アラン・ワッツ、アレン・ギンズバーグ、ティック・ナット・ハン、ダライ・ラマ、その他の合理的且つ非有神論的な言葉で仏教を説明する著者など、すべて19世紀から20世紀の人々の書物を活用しています。これらの著者たちは經典を書いていませんが、彼らの書物を「聖書」にまとめることで、ロペス先生は事実上それらを「聖典化」したのです。ハリソン先生の言葉にもあるように、もしこれらの書物に意味があり、真実であるならば、それらはたとえ著者たちのイマジネーションに由来するものであっても、ブッダの言葉として容認されるかもしれません。これらの現代書物を「經典」として考え、またあなたや私、その他の方々が書く、もしくはすでに書かれた言葉は、意味のあるブッダからの真実のメッセージだと考えることができるというのは、本当に壮大で寛容な感覚なのです。ロペス先生の現代仏教は非常に重要ですが、1973年から1980年までの期間に書かれた書物しか網羅していません。未来の仏教は、現代仏教に基づいて構

築し、1980年から今日に到るまでの新しい仏教の書物を加えなければなりません。これらの新しい書物は科学的に容認される言葉で大乘仏教の有神論を説明しているはずです。すでに提言したように、幸先の良いスタートを切るには、神聖なる存在をフィクションとして捉え、その恵み(グレイス)の効能を分析することだと思います。未来の仏教には、『現代仏教聖書』に加える新たな経典と書物が必要なのです。おそらく、その新しい大蔵経は『令和新修大蔵経』と呼ぶことができるでしょう。

もし過去の固定した伝統を基盤とした仏教を維持することに固執するならば、ほぼ仏教の未来はないでしょう。しかし、もし新たな多種多様な仏教を創造してきた過去の仏教徒たちの例に習うことができ、且つ仏教を寛容であり続けさせ、業と恵み(グレイス)の教訓を創造的に応用し、教義的解釈に固執することを避け、夢とファンタジーを採用し、ブッダの新しい言葉を書くことができるならば、仏教は壮大な未来を持つことができるでしょう。